

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：34429

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02254

研究課題名（和文）旅行キャリア発達のための熟達化過程の解明とキャリア対応型観光支援システムの開発

研究課題名（英文）Elucidation of the Process of Gaining Expertise for Developing a Travel Career and the Development of a Support System for Career-Corresponding Tourism

研究代表者

林 幸史（HAYASHI, Yoshifumi）

大阪国際大学・人間科学部・准教授

研究者番号：10567621

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、次の3点を明らかにした。第一は、旅慣れた人は、荷物をコンパクトにまとめ、交通機関を乗り分けてスムーズに移動できるだけでなく、観光資源に対する評価基準が確立されており、旅先でのトラブルなども肯定的に捉えることができることである。第二は、旅慣れた人になるには、歩く旅や一周旅など、移動すること自体を楽しむ経験が必要であることである。第三は、旅慣れることによって、その土地の日常的な風景に視点が向かうようになることである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、観光者の行動特徴を明らかにする研究においては、人口統計学的変数や心理学的変数でセグメンテーションすることが主流であった。本研究は、それらの研究とは一線を画し、過去の旅行経験という切り口から、旅行経験を積むことで熟達する存在として観光者を捉え直した。そして、熟達した観光者となるために必要な経験や、観光資源に対する視点や評価の変化を明らかにした。このことから、本研究は、日本人の観光旅行の充実と拡大に貢献する可能性を有している。

研究成果の概要（英文）： The following three points were clarified in this study: First, people who travel regularly can not only organize their luggage in a compact manner and move smoothly by selecting different transportation methods accordingly, but also have established evaluation standards for tourist resources and can even positively perceive complications that occur during travels. Second, becoming a seasoned traveler requires that one enjoy moving itself, such as walking or taking a round-trip. Third, by getting used to traveling, the traveler's perspective becomes directed to the daily scenery of the land.

研究分野：観光心理学

キーワード：旅行キャリア 旅行熟達 過去の旅行経験 観光写真調査法 観光資源 記憶に残る旅

1. 研究開始当初の背景

ライフステージからキャリアへ

これまで、観光者の行動特徴を明らかにする研究においては、人口統計学的変数や心理学的変数でセグメンテーションすることが主流であった。例えば、Gibson & Yiannakis(2002)は、人生を四季になぞらえた4つの発達期から成る Levinson(1978)のライフサイクル論を用いて、ライフステージの進行による観光者の行動類型の変化を明らかにした。また、林・藤原(2008)は、日本人海外旅行者の観光動機が年齢を重ねるにつれ、新奇性への欲求から本物性への欲求へと変化することを明らかにした。これらは、ライフステージの進行に応じて旅行の楽しみ方が変わることを示唆しており、加齢によってもたらされる発達的な変化と言える。

本研究は、それらの研究とは一線を画し、過去の旅行経験という切り口から、旅行経験を積むことで熟達する存在として観光者を捉え直した。Pearce(1988)は、Maslow(1943)の欲求階層説に依拠した旅行キャリアラダー(travel career ladder)と呼ばれる階層モデルを提唱した。個人がどの旅行キャリアに位置するかは、過去の旅行経験やライフステージによって規定される。旅行キャリアには、「生理的欲求レベル」、「安全(もしくは危険)欲求レベル」、「所属と愛の欲求レベル」、「自尊欲求レベル」、「自己実現欲求レベル」の5段階があり、個人の観光動機は、いずれかの旅行キャリアレベルに該当すると考えられた。職業上のキャリアと同様に、観光者としての経験が蓄積されることで、それがその人の観光行動にも影響を及ぼすようになる。ただし、旅行キャリアのラダーモデルは、十分な実証的裏づけが得られなかった(Pearce & Lee, 2005; Ryan, 1998)。その理由は、旅行キャリアの向上に伴う発達的な変化を観光動機の変容という単独の現象のみで捉えようとしたことにある。本研究では、旅行キャリアを、個人の旅行史における経験内容とそれにもとづくスキルや知識、さらには、過去の経験に対する意味づけや将来の旅行構想までも含む概念として位置づけた。旅行キャリアは多側面の広範な概念となるが、本研究では、特に過去の旅行経験量と、それにもとづくスキルや知識の側面に着目した。

観光者としての熟達

人が経験を積むことによって知識や技能が向上し、変化を遂げることを熟達化という。熟達化は、直接経験(身体を通じた事象への関与)や間接経験(言語・映像を通じた事象への関与)をすることによって、既存の知識、スキル、信念の一部が修正されたり、新しい知識、スキル、信念が追加されたりすることによってもたらされる(松尾, 2006)。林・小杉(2018)は、大浦(1996)が指摘する3つの熟達者の特徴(「下位技能の習熟」、「適切な問題解決のための知識の獲得」、「適切な評価基準の獲得」)が観光行動にも当てはまることを指摘した。人が旅行経験を積むことによって、知識やスキルを向上させることが報告されている研究も散見される。Tsaur, Yen & Chen (2010)は個人観光者の知識とスキルについての概念化と尺度開発を試みた。現地環境への適応や観光地での買い物の仕方に関わる「旅先での能力」、旅程の立て方や宿泊施設の予約に関わる「旅行前の準備」、旅先でのトラブル対応に関する「非常時の対応」という3次元を見出した。これらは、観光者としてのスキル向上についての研究であるが、Pearce & Foster(2007)は、旅行経験を積むことがより汎用性の高いジェネリック・スキルの向上に寄与することを明らかにした。Pearce & Foster(2007)は、ウェブ上の旅行記の分析から、問題解決と思考スキル、対人スキル、適応力と柔軟性などのスキル向上に関する記述を見出した。それを受けて、Scarinci & Pearce(2012)では、海外旅行経験が4回以上の学生で、それらのスキルが有意に高いことが認められている。本邦においても、布施・難波・小平・久木山(2005)が、旅行を円滑に進めたり、積極的に楽しんだり、印象の良いものにするための技能としてトラベル・スキルという概念を提唱した。トラベル・スキルには、目的の明確化、情報収集、計画性、荷物整理・管理、行動力、不測の事態への対応など10の下位尺度が設定された。そして、各尺度と、旅行経験回数、旅行に対する好感度、旅行に対する積極性との関連について分析を行った結果、好感度や積極性とスキルとの間には関連が認められるものの、経験回数と各尺度との間には、 $r=.20$ 以上の相関は認められなかったことを報告していた。

2. 研究の目的

- (1) 観光者が経験を積むことによる熟達過程を明らかにすることを目的とした。具体的には、熟達した観光者となるために必要な経験やスキルを明らかにし、熟達に伴う認知・感情変容についても明らかにすることを目指した。
 - (2) 旅行キャリア発達のための観光支援システムを開発することを目的とした。具体的には、旅行キャリアの段階に応じて、異なる観光情報の提供や地域住民や熟達者の視点にもとづく行動プランを提案し、それらの効果を明らかにすることを目指した。
- ※2020年1月からの新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、(2)の研究は実施できなかった。

3. 研究の方法

- (1) 旅行熟達尺度開発のために1100名を対象にweb調査を実施した。林・小杉(2018)は、大浦(1996)が指摘する3つの熟達者の特徴(「下位技能の習熟」、「適切な問題解決のための知識の獲得」、「適切な評価基準の獲得」)が観光行動にも当てはまることを指摘したことから、尺度を作成するにあたっては、(1)下位技能の習熟(情報収集と計画、荷物の最少化)、(2)適切な問題解決のための知識の獲得(円滑な移動、現地での順応、トラブル対処)、(3)適切な評価基準の獲得(地域の固有性への気づき、評価基準の確立、肯定的解釈)の3領域8つの下位概念について、尺度項目を作成した。それらに加えて、過去の旅行経験、場所志向性尺度などについても尋ねた。
- (2) 旅行熟達をもたらす観光経験を明らかにするために1200名を対象としたweb調査を実施した。先の研究で開発した旅行熟達尺度に加えて、各年代での記憶に残る観光経験について自由記述形式で尋ねるとともに、それらの経験が、いずれの観光経験タイプ(健康回復、娯楽追求、新奇経験、文化見聞、自然体感、関係強化、現地交流、自己拡大)に該当するのかわを選択してもらった。自由記述については、テキストマイニングの手法によって、頻出語を整理し、観光者の熟達レベルとの関連について対応分析を行った。また、各年代での旅行頻度、同行者、旅行形態などについても尋ねた。
- (3) 『観光写真リサーチプロジェクト』という名称のウェブサイトを構築し、奈良県内を訪問した観光者を対象に観光写真調査法(林, 2014, 2019)での調査を実施した。具体的には、「5~10枚の写真を使って、あなたの奈良観光を表現して下さい」との教示を与え、調査協力者自身が奈良県内で撮影した写真をアップロードしてもらった。さらに、撮影理由や写真で表現された体験が意味するところについても尋ね、旅行熟達尺度にも回答してもらった。112名の協力者から745枚の写真が提供された。

4. 研究成果

主な研究成果は、次の3点に集約される。

(1) 旅行熟達の構造を明らかにした。

旅行熟達尺度の因子分析の結果、「評価基準の確立」、「肯定的解釈」、「トラブル対処」、「円滑な移動」、「荷物の最少化」の5因子構造が確認された。各因子の α 係数は.72~.88であり、いずれも十分な信頼性が認められた。次に、因子分析で見出された5因子について、下位尺度得点を算出した。各下位尺度得点と過去の旅行経験量との関連を検討するために年齢別での相関分析を実施した。各下位尺度得点と相関分析の結果、相関関係は弱いながらも、旅行経験量が多い人ほど、旅行熟達尺度の得点が高いことが分かった。その後の質問紙調査においても、安定して5因子が抽出されている。

(2) 旅行熟達に至る観光経験を明らかにした。

記憶に残る観光経験については、2823件の記述が得られた。経験タイプの内訳は、娯楽追求が715件(25%)、健康回復が552件(20%)、関係強化が452件(16%)、文化見聞が393件(14%)、新奇経験が293件(10%)、自然体感が245件(9%)、現地交流が94件(3%)、自己拡大が79件(3%)であり、娯楽追求と健康回復に関わる経験が半数近くを占めた。

各年齢層(20代~30代の低年齢層と40代~50代の中年層)での旅行熟達尺度得点に応じて、初級者と上級者とに区分した。そして、旅行熟達度と記憶に残る観光経験の記述語句との対応分

析を実施した(図1)。低年初心者は、「卒業旅行」、「新婚旅行」、「修学旅行」といった節目旅行に関する記述が多かった、中年初心者は、「夫」、「子ども」、「夫婦」などの語句からも家族旅行に関する記述が多かった。その一方で、低年上級者や高年上級者は、「キャンプ」、「体験」、「歩く」、「一周」などの語句から、活動的な傾向が強く、移動すること自体を楽しむ旅行経験があることが覗える。また、「寺院」、「温泉」、「自然」、「文化」、「鉄道」などの語句から具体的なテーマがある旅行が多いことが分かった。20代の頃の観光旅行に限定した分析からも、上級者は歩く旅や一周旅、ヨーロッパやオーストラリアといった海外旅行で感動体験があることも示唆された。このことから、旅行熟達者は、テーマ性のある旅行や活動的な旅行において、熟達度を高めていることが覗える。

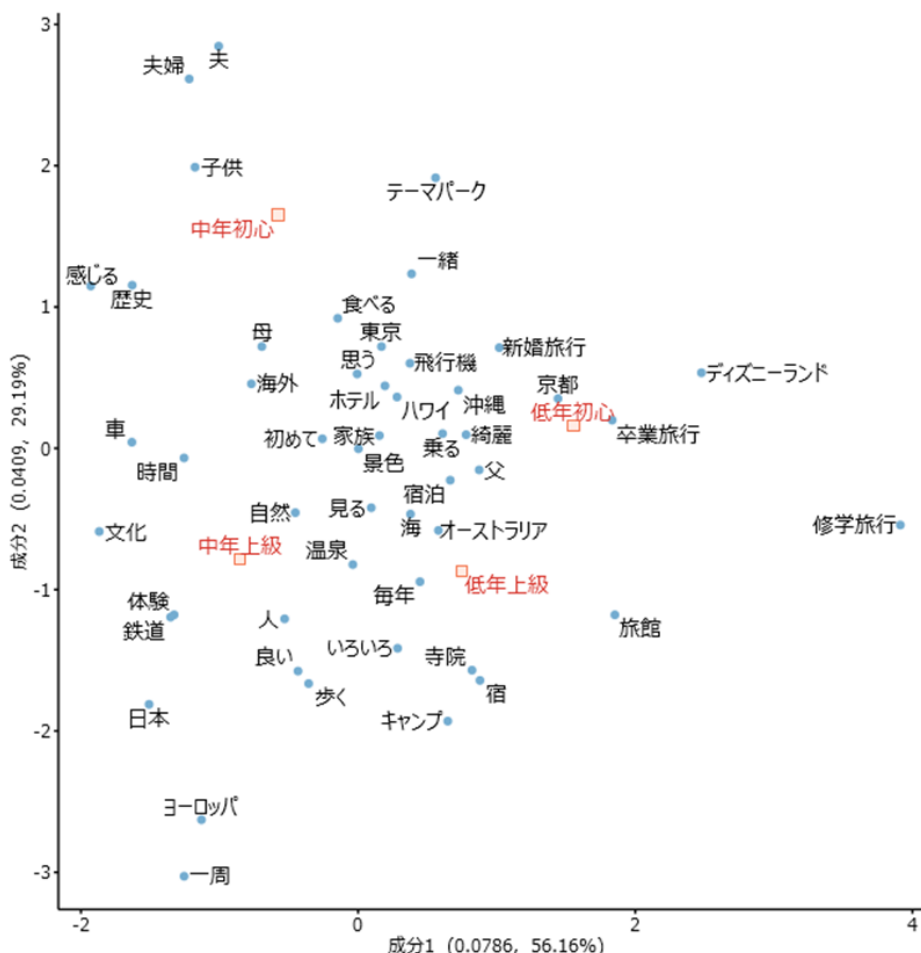


図1. 熟達度と記憶に残る観光経験の対応分析

(3) 旅行熟達度からみた観光者の視点と観光資源に対する魅力評価の相違を明らかにした。

調査協力者から得られた 745 枚の写真を、林(2019)の分類カテゴリを参考に分類した。必要に応じて新たなカテゴリを設定した結果、撮影対象は 28 のカテゴリに集約された。観光者は、旅行熟達尺度得点をもとに、熟達低群、熟達中群、熟達高群に区分するとともに、奈良県への訪問経験や在住の有無によって、訪問経験少群 31 名(平均年齢 32.94 歳)、訪問経験多群 56 名(平均年齢 42.75 歳)、奈良県内居住者 25 名(平均年齢 43.60 歳)としても区分した。熟達度と訪問経験に関しては、熟達高群では訪問経験多群が有意に多く、熟達低群では訪問経験少群と県内在住者が有意に多かった。

訪問経験と撮影対象の関連を検討するために、 χ^2 検定を実施した。その結果、訪問経験少群では、仏像、鹿、人といったカテゴリの写真が多く、日本家屋や風景カテゴリの写真は少なかった。訪問経験多群では、日本家屋の写真が多く、樹木植物の写真が少なかった。奈良県居住者は、樹木植物や風景の写真が多く、案内板や看板の写真が少なかった。また、熟達度と撮影対象の関連を検討したところ、熟達低群は、案内板・看板やキャラクター、イベント・行事・祭りカテゴリ

の写真が多かった。一方、熟達中群は、寺院建築や仏像関連の写真が多かった。熟達高群では、案内板・看板の写真は少なく、温泉・銭湯の写真が多かった。これらのことから、訪問経験を重ねたり、観光者としての熟達度を高めたりすることによって、その土地にやってきたことを意識させる案内板や看板、シンボリックな対象に目を向けることから、その土地の日常的な風景に視点に移ろうことが推察される。

被写体の撮影理由の分析をもとに、熟達度による観光資源に対する魅力評価の相違を検証した。熟達度との関連を明らかにするために対応分析を実施した結果が図2である。熟達度が低い場合は、大きさを感じさせたり、地方色を感じさせたりする観光資源を魅力あるものとして捉えるが、熟達度を高めるにつれて、美しさや静けさを感じさせる観光資源や、古さや日本らしさを感じさせる観光資源を魅力的に捉えることが明らかになった。

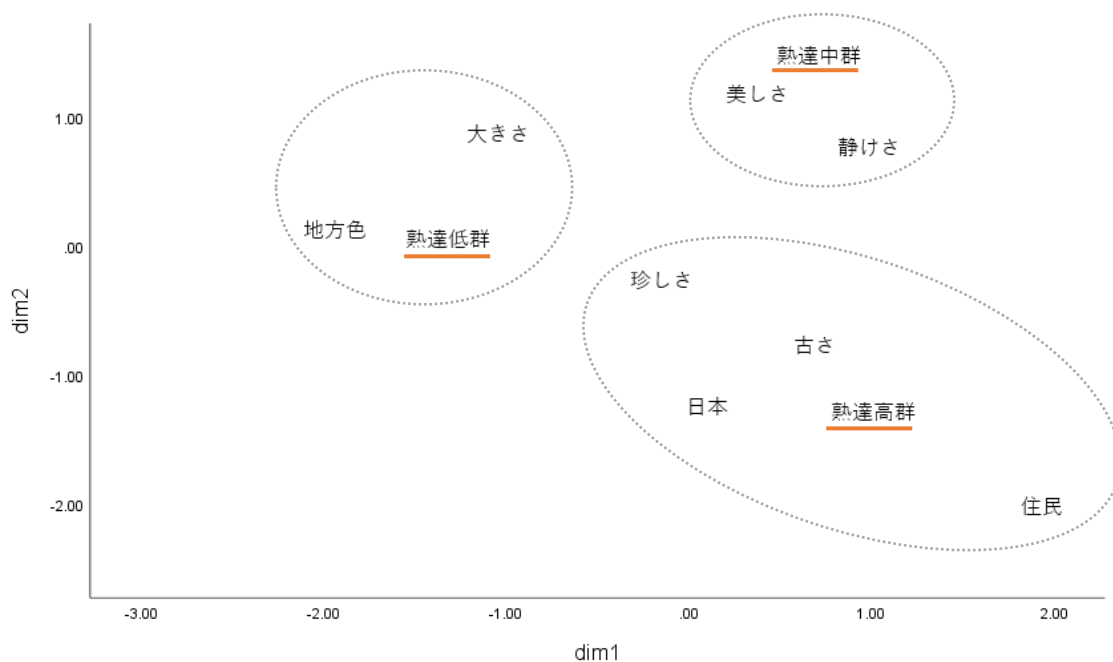


図2. 熟達度と観光資源に対する評価の対応分析

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 林 幸史	4. 巻 35
2. 論文標題 観光写真調査法による観光地の魅力評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 50～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14966/jssp.1819	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 林 幸史	4. 巻 50
2. 論文標題 観光写真調査法で地域の魅力を再発見する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 交通科学	6. 最初と最後の頁 18～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34398/kokaken.50.1_18	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡本卓也	4. 巻 23
2. 論文標題 「道」と「歩くこと」の社会心理学(2)：コミュニティと道	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コミュニティ心理学研究	6. 最初と最後の頁 87～99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32236/jscpjournl.23.2_87	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡本卓也	4. 巻 6
2. 論文標題 「道」と「歩くこと」の社会心理学(1)：国内のロングトレイル，フットパス，オルレの現状と可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 95～121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 林 幸史、小杉 考司	4. 巻 34
2. 論文標題 過去の旅行経験からみた観光地イメージ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 38～46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14966/jssp.1627	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 0件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 岡本卓也
2. 発表標題 観光旅行者のリピート行動に関する研究(3)
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yoshifumi HAYASHI & Takuya OKAMOTO
2. 発表標題 The most memorable travel experiences from the point of view of travel career
3. 学会等名 XVI European Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 幸史・岡本 卓也
2. 発表標題 旅行キャリアの発達過程(3) 年代別でみた印象深い旅の経験と同行者
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 幸史
2. 発表標題 四国遍路の接待者(1) 発心の道場 阿波国篇
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 幸史
2. 発表標題 旅行キャリアと最適な旅の経験(2) 旅行キャリアタイプからみた印象に残る観光経験
3. 学会等名 第34日本観光研究学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林幸史・岡本卓也
2. 発表標題 旅行キャリアの発達過程(2) 旅行熟達尺度の開発
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林幸史・岡本卓也
2. 発表標題 旅行キャリアと最適な旅の経験(1) 個人にとっての「いい旅」からの検討
3. 学会等名 日本観光研究学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本卓也
2. 発表標題 観光旅行者のリピート行動に関する研究(2)
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshifumi Hayashi & Takuya Okamoto
2. 発表標題 The most memorable travel experiences from the point of view of travel career
3. 学会等名 European Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本卓也
2. 発表標題 観光旅行者のリピート行動に関する研究(1)
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshifumi Hayashi
2. 発表標題 Development of the Wanderlust Scale
3. 学会等名 The Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林 幸史
2. 発表標題 旅行キャリアの発達過程(1)：宿泊経県値とトラベル・スキルからの検討
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林 幸史
2. 発表標題 旅は憂いもの辛いもの?：大学生の一人旅イメージの分析
3. 学会等名 日本社会心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林 幸史
2. 発表標題 奈良を訪れた旅行者の観光経験：観光写真調査法による把握
3. 学会等名 日本観光研究学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林 幸史・岡本 卓也
2. 発表標題 旅行キャリアの発達過程(2)：旅行熟達尺度の開発
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小杉考司	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 11
3. 書名 『たのしいベイズモデリング』心の旅が始まる--観光のイメージの世代間比較--	

1. 著者名 林幸史	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科	5. 総ページ数 6
3. 書名 『心理コミュニケーションの扉』見えない世界への扉 四国遍路を歩くということ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡本 卓也 (OKAMOTO Takuya) (30441174)	信州大学・学術研究院人文科学系・准教授 (13601)	
研究分担者	小杉 考司 (KOSUGI Kouji) (60452629)	専修大学・人間科学部・教授 (32634)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------